国際協力最前線

第151回
「実感する現状と課題解決に向けて」

理学療法士　三輪敏之

私はタイ・コーンケーン県の市内から北に約３０ｋｍ離れた場所にあるナムポーン病院で理学療法士として理学療法科、デイケア、訪問、ヘルスプロモーションの活動を行っている。

◇活動における概要

私がまず、理学療法士として最低限必要と考えているのが患者中心の医療とクリニカルリーズニング（対象者の訴えや症状から病態を推測し、対象者に最も適した介入を決定していく一連の心理的プロセス）を行った治療である。しかし、実際に赴任してみると、任地で行われていたのは物理療法やマッサージなどの対症療法であり、根本的な原因に対する治療や、日常生活動作の訓練や運動療法などのリハビリは不十分だった。配属先でのリハビリの質は改善の余地があったため、助言や指導を中心に行うこととした。例えば、デイケアでは提供しているサービスの改善、訪問リハビリでは家族･患者への指導や訪問スタッフへの助言、理学療法科では勉強会の実施などである。

訪問リハビリの様子

デイケアの様子

◇具体的な活動の紹介

赴任直後、利用者への血圧測定や薬湯での手足洗浄は毎回行われていたが、その他の時間は自由時間になっていることが多く、利用者は寝ている時間が長かった。これにより利用者の心身機能の低下が予測されたため、日本のデイケアで行われているような体操・レクリエーションを取り入れた。

最初の頃は半数以上の職員は協力的ではなかったが、会議にて目的の説明や感じていることなどを話し、「目的に沿って行えているのであれば自由でよい」と伝えた後は、私が不在のときでも、職員たちで体操やレクリエーションなどを率先してやってくれるようになった。残りの任期でさらなるサービスの改善を図れるように協力していきたい。

◇理学療法士として感じた任地における現状と課題

任地で感じたのは、私が出会った医師や看護師には明確なビジョンがあり、ナムポーン郡の地域包括ケアシステムでは日本より優れている部分も多い。半面、任地における臨床現場ではまだまだ多くの課題があると感じた。一例をあげると、脳卒中などの患者に対して理学療法士による適切な評価･治療が不十分なことに加えて、チーム医療による多職種間での協議が十分に行われておらず、安易に「身体機能や日常生活動作能力の向上が困難」という評価を下している事例が多い。

６月初旬に私の任地で「患者の生活を支えるチーム医療」という内容の国内研修を行った。この研修は、タイ各地でリハビリ分野・高齢化対策分野で活動している協力隊員と、国際協力機構（ＪＩＣＡ）技術協力プロジェクト「高齢者のための地域包括ケアサービス開発プロジェクト」の共同開催で行われ、ナムポーン病院の理学療法士含む約７０人の関係者がタイ全土から参加した。そこでチーム医療の大切さやノウハウを集める重要性、そして患者のできないことをできるようにするにはどうすればいいかなどについて学び合うことができた。研修参加の機会が、チームによる適切な医療の提供をどのようにすれば良いか、そして患者に寄り添う医療とは何かを改めて考えるきっかけになればと思った。また、この研修が配属先やタイ全体の医療の質の向上につながれば幸いだ。

【筆者紹介】
三輪敏之（みわ・としゆき）　兵庫県にある回復期・維持期の病院で約３年間勤務後、２０１７年9月よりＪＩＣＡ青年海外協力隊（理学療法士）としてナムポーン病院にて活動。大阪府池田市出身。１９９１年生まれ。